

◆聞き取り調査

【調査日】平成27年2月28日（土）

【話者】H. Y

聞き手 : 今日の聞き取りのテーマは、石狩アイヌに関することと現代に伝わるアイヌの伝統文化についてです。  
まず自己紹介をしていただけますか。

H. Yさん : 旭川市出身のH. Yです。

聞き手 : 家族構成を教えてください。

H. Yさん : 私の父はH. Y2といます。そして母はI. Sです。私の母がアイヌの血を引く人で、母の父親はI. A、母の母親がK. Uという者です。I. Aの父親がI. Tという仙台から来た和人で、母親がHというアイヌでした。K. Uの父親はK. H、母親はUです。Iのほうの家系は、私の息子がアイヌ協会に入るときに戸籍を提出しているので、もう少し名前がわかると思いますが、私自身は今名前を覚えていません。私の父は和人でしたが、父は母親（H2）の連れ子で、H2さんが阿寒のほうに住んでいるK. Sというアイヌの後妻に入ったので、アイヌの系譜は持っています。つまり私の父の母親は和人で、アイヌであるK. Sさんと私の父は血は繋がっていませんでした。K. Sさんは、Yというお店を阿寒湖で営んでいました。私の父の種違いの弟——H. Yさんの祖母（H2）とK. Sさんとの子どもにあたるTさんは、K. Kさんという方と結婚し、彼女は今もYで働いています。兄弟は兄が2人います。

聞き手 : H. Yさんの母親であるI. Sさんは、どこ出身のアイヌですか？

H. Yさん : 旭川です。私の父がいつ阿寒に行ったのかは、わかりません。

聞き手 : H. Yさんは、いつまで旭川にいたんですか？

H. Yさん : 17歳くらいまでだったと思います。私の父のH. Y2は私が小学校4年生のころに亡くなっていて、母がH2という男性と再婚しました。なので、今の母の名前はH. Sです。

聞き手 : 旭川にいたところは、アイヌ伝統文化に関する活動を何かしていましたか？

H. Yさん : それまで札幌の狸小路などでお店を出していたうちの叔母が上川のポンモシリというところで商売を始めたので、そこで初めてアイヌの民族舞踊を見ました。その時は小学校5年生くらいだったでしょうか。それから、観光客の前でアイヌの民族舞踊を踊り始めました。

聞き手 : 上川と旭川って近いんですか？

H. Yさん : 60キロも確か（離れて）なかったような気がします。1時間か…1時間もしないくらいで着いた記憶があります。

聞き手 : 当時のメンバーって覚えていますか？

H. Yさん : I. H、T. A、Kのおばさん、T2おばさん、M. S、T3、I. Fのメンバーで踊っていました。その踊りを見ていた子どもたちは、I. Fの子どもでK2、K3、Y2というのがいました。K3やY2とは一緒に踊った記憶があります。観光客相手だったので、バスが停まったら踊りに行くというような感じでした。おばあちゃんたちが踊っているのを見て、アイヌ民族舞踊を覚えました。日曜日だけでしたけど。I. Fさん以外は、みんなフチ（婆）でしたね。最初のころはHちゃん（K. H2）のおばあちゃん——Y3婆っていうのがいました。Y3婆が歌を歌っていました。

聞き手 : フチ達の思い出話があれば、教えていただけますか？

H. Yさん：あんまり覚えてないんですが、当時私は踊りがすごく好きで毎回毎回見に行っていたのです。T. Aというフチは、私の祖父I. Aの妹に当たる人なのです。私はアイヌの踊りがすごく好きで、毎週毎週見に行っていたので、T. Aさんが「お前、そんなに踊りが好きなら一回やってみるかい？」と言って、自分の持っていた着物を私に着せてくれたのが始まりでした。

聞き手：なんで、アイヌの踊りにそんなに魅力を感じたんですか？

H. Yさん：なんでなんだろう。わからないんですけど、実は小学校入る前から小学校2～3年生の時まで日本舞踊を習っていたんです。それは母の勧めだったんだと思うんですけど、アイヌの血を引くK4家一族全員習っていました。自分がやりたいと言ったわけじゃないと思うんですけど…日本舞踊はものすごく練習が厳しくて、手が震えているのに練習していたのを覚えています。すごく辛かったです。扇子一つ開くのにも、1時間くらい練習させられたという辛い記憶しかありません。だけど、踊りは好きだったんじゃないかと思います。変だねって思われるかもしれないんですけど、私は小さいころ両親とではなく、ずっと伯母(I. S2)と一緒に住んでいたんです。I. S2は私の母の姉に当たる人です。伯母は旭川に住んで、毎日上川のポンモシリまで車で通っていたんですけど、日曜日だけ私も一緒に車に乗ってポンモシリに通ったんです。学校行く時は、朝早く起きれないんですけど、日曜日に伯母と一緒にポンモシリに行く時だけは朝も張り切って起きていました。5月くらいから10月くらいまでの短期の仕事だったんですけどね。

聞き手：伯母さんが好きだったんですね？

H. Yさん：幼少のころから話すと、すごく変だと思うんだけど、近文部落の生活館のすぐ近くに私が入っていた保育所があったんだけど、伯母と一緒にいたくて保育所にも行かず…ずっと伯母と一緒にいたんで

す。私が小学校入る前、伯母は洞爺湖で商売をしていて、私もずっと洞爺湖にいたんです。それで小学校の1~2年生のころかな、伯母が札幌の狸小路で商売をするようになったんです。そのころは、夏休み、冬休み、春休みって、学校のない時は全て伯母のところに行っていました。伯母が離婚して旭川に帰って来た時は嬉しくて、すぐ一緒に住みました。おかしいと思われるかもしれないけど、ずっと伯母について歩いていました。

聞き手 : 両親は何も言わなかったんですか？

H. Yさん : 何も思っていなかったんじゃないですかね。私の1番上の兄Y4も、I. S3さんの元旦那さん——私が中学2年生くらいの時に亡くなってしまったんですけど——M. Tさんにずっとついて歩いていましたし。私たち3人兄弟、Y4とMとY (H. Yさん) …っていたんですけど、両親について歩いてしたのは真ん中のMだけでした。変わった家族構成ですよ。M2家では子どもがいなかったから、楽しそうでしたけど。うちは一族で民芸品店を営んでいたの、夏は商売をやって、冬はみんなで旭川の作業場に集まって商品を作るという生活をしていました。うちの祖父 (I. A) が旭川の錦町に土地を持っていて、そこにお婆の家があって、その下に作業場があったんです。そこに一族で住んで、ほんとにコタン (集落) みたいな感じだったかな。うちの両親は、旭川と深川の間にある神居古潭というところでお店を持っていたし、うちのおじとお婆は最初のうちは洞爺湖でお店を持っていました。だけど冬場は旭川の錦町に集まって作業するという感じでした。札幌に出てきてからは、365日札幌にいるっていう感じなんですけど。私の祖父も、熊を飼いながら神居古潭で生活していましたよ。

聞き手 : 熊を飼いながら？もっと詳しく聞かせてください。

H. Yさん : 私が小学校入る前に死んじゃったから、多分みんなで食べたんだと思います。殺したのか、死んじゃったのか。イオマンテ (熊送りの

儀式) したとかは全く覚えてないです。私のおじいさんは熊撃ちだったみたいです。どこからその熊を持ってきたのかはわからないんですけど、私もその熊は見ました。ある程度大きくなったら、すごく頑丈な檻に入れられていたのは記憶にあります。ヌササン(祭壇)もちゃんとして、ゴザもかけて、雪の上で血だらけになった熊を捌いている写真があります。そういう写真を見て、「ああ、うちのじいさんもこういうアイヌみたいなことしてたんだな」というふうに思いました。I.AはHとI.Tのあいだの子どもでハーフだったから。I.Tは、確か仙台から来たって話だったな。I.Aの話で一番覚えているのは、私の顔見るといつもジャンケンをしてくれて、私が勝つと100円くれるということです。勝つまでやってくれるけど、勝たないと絶対にくれないんです。腹巻に小銭を入れてたんです。

熊以外にも、タヌキを連れて帰ってきたことがありました。タヌキってすごくきかなくて、かじられるから絶対そばに寄るなと言われてました。そのタヌキもどこに行ったかは知りません。山に行って熊撃ちみたいなことをしてくるから——あれは木ねずみだったと思うんですけど——それもいっぱい獲って帰ってきたこともありました。きれいにその木ねずみの皮をなめして、毛皮のストールを作ってくれました。編み物も好きだったみたいで、セーターも作ってくれたことがあります。

聞き手 : 多才なおじいちゃんだったんですね。

H.Yさん : 私の娘が生まれた年に亡くなっちゃったんですよ。木彫りをしているのを見たことないんですけど、元々大工だったようで、家を建てるのはやってました。仕掛け弓も作っていたようで、全然知らなかったんですけど、大阪の民博でたまたま仕掛け弓を作るおじいちゃんの姿がビデオに映っていました。知らなかったんですけど、「いつも熊撃ちに行ったり、狩猟民族だから確かにそういうことやっていてもおかしくないなあ」というふうに思いました。

聞き手 : 職業が猟師だったってことですか？

H. Yさん：何やっていたんでしょうね。でも民芸品店もやっていたし、いろんなことやっていたんでしょうね。仕掛け弓のビデオを民博で見たとき、生きている時にもっと聞いておけばよかったなというふうに思いました。

聞き手：K. Uさんの記憶はありますか？

H. Yさん：K. Uさんは、私の母が15歳くらいの時に亡くなっているので、私は1度も会ったことがありません。私の母が言っていたのは、K. Uさんはアイヌ語がペラペラだったそうですが、そのことは…アイヌの言葉を話すと差別とかあったようで、隠していたそうです。一切聞かせないようにして育てられたそうです。だから、母はアイヌ語一切知りません。I. S3っていう伯母は母より9つ年上なので、アイヌ語は少しわかっていたようです。ポンモシリで一緒に踊っていた人たちの中にも、アイヌ語をわかっている人たちはいただろうけど、私には一切教えてくれませんでした。でも、ちょっとした単語は使われていました。

聞き手：例えばどんなふうに？

H. Yさん：やっぱり日本人の観光客が多いので、悪口を言う時はだいたいアイヌ語を使っていました。何を言ってるのか私は最初わからなかったんですけど、日本人観光客がいなくなったあと教えてもらいました。少し抜けた人っていう意味で「ハイタクル」とか、もっとひどい人には「ルハイタクル」…って。「あの人、ルハイタだね」とかって言っていましたね。

聞き手：日曜日に踊っていた時、踊りのアドバイスはフチたちから受けたりしましたか？

H. Yさん：私もそうして子どもたちに踊りを教えたんだけど、例えば、「鶴の

舞」…っていう踊りがあって、小鶴が真ん中で踊って両端で親鶴が踊るんだけど、その時に子どもが小鶴させられるの。そして小鶴の後ろでフチたちが、ああでもない、こうでもない…って文句たれるんだ。それに合わせて必死になって覚えて、そういうようにして跳ね方とか覚えたかな。私も同じことをしたよ、自分の子どもに。Y 5 (H. Yさんの娘) は1歳くらいのころから親戚の子どもと一緒に踊っているのを見ていたし、踊り始めたのは4歳くらいだと思うけど。小学校入って高学年くらいになると、もっと真剣にやらなきゃだめだから跳ね方もガツンと教えたよ。小さいころは、ちょっと踊っていたらチャホヤされちゃうからね。

聞き手 : 現代に受け継がれるアイヌ伝統文化についてお聞きします。今はどんな伝承活動してらっしゃいますか？

H. Yさん : 団体と言っていいのかな、上川にいる親戚たちとやっているのが初めだから、別に保存会とかって名前が付いているわけではないんだけど、それがルーツです。A1 (団体名) とA2 (団体名) という団体でいろんなことをやりますよ。歌を歌ったり、ムックリ (口琴) を弾いたり、トンコリ (アイヌの弦楽器) を弾いたり、踊りを踊ったり、どちらの団体でも同じです。

聞き手 : それぞれの団体で取り組む時の、意識の違いはありますか？

H. Yさん : ライブのときはミュージックとして、伝統の芸能を伝承する時は伝承者として挑みます。やりがいは全てに感じますが、気持ちの持っていていき方、何を伝えたいのかが違います。A2 (団体名) をやっているときは、アイヌの伝統文化は伝統文化ですごくいいのだけれども、伝統ばかりじゃなくてライブ演奏にすることで、今までアイヌ音楽に興味がなかった人でも「アイヌ音楽って面白いな」と簡単にアイヌを知ってもらえる場面でもあるから。伝統もすごくいいことで、文化は伝統から何百年もかけて変わっていくものだから、そのひとつの形だと思っています。自分は元々伝統文化から入って

いる人間だったから、A2（団体名）の活動を絶対的に称賛していたわけではなかった時期もありました。けど今は、人が踏み込みやすい文化の入り口になればいいかなという気持ちでやっています。

聞き手 : 他の地域のアイヌと石狩アイヌの違いはなんだと思いますか？

H. Yさん : 着ている衣装、言葉も違うと思う。…けど一番思うのは、自分が最初に始めた踊りの違いです。上川の踊りはステップや動きが柔らかくてきれいです。どこにも引けを取らないと思います。でもそれは、小さいころからやっていないと身に付かなくて、A1（団体名）では継承できていない部分もあります。年をとってから始める場合は、相当な努力が必要です。

聞き手 : H. Yさんは、将来の子どもたちに踊りを教えたいという気持ちはありますか？

H. Yさん : 今の子どもたちというか、30代より若い人たちって踊りをやる人は増えてきていると思います。60代、70代も多くて…私たち40代の人ってすごく少ないのだけれど、今は踊る人たちが出てきているので、きっとここから下の世代は教える人や伝承者が増えてくるのではないかと期待しています。